

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第192号（2022年5月）

常世の風に吹かれて呟いて（1） 白井啓治

（今回より故白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を抜粋して連載します。）

『天に昇る竜巻の力は人知では抑えられない』

（2012年5月11日）

今日は美浦まで稽古に出かけてきた。全員未だ手探りの状態で、稽古と言うまでには至らなかった。しかし、ユッキーも久美ちゃんもそれぞれの個性的な美しさが見えて大層楽しかった。これから本格的なイメージ創りに入っていくのであるが、二人の舞の美しさはさらにスケールアップしていく、その過程を見るのは演出家の楽しみである。

美浦の帰りに、北条にある蚕陰神社に寄って来たのであるが、途中、6日の竜巻の爪痕を目の当たりにして、そのパワーの計り知れないスケールにただただ驚くばかりであった。家が土台を離れひっくり返っていたり、車がかさまに転んでいたりと、家が粉々になって潰れていたりと凄まじい光景であった。

筑波山のすそ野を下って来るとき、石岡方面、霞ヶ浦方面に黒い雲の塊がいくつもあり、幾つかの雲の塊からは滝のような感じに雨の落ちてくる様子が見えた。天から雨の柱が降りてきているようであった。竜巻の爪痕や雨の柱の光景を見な

がら、バベルの塔を思ってしまった。利口ぶっていい気になって事を運んでいると大変なしっぺ返しをもらいそうである。原発再開を願うての電気料金値上げの申請をしたなどのニュースが流れていたが、後始末の方策や技術が確立されていないのに、これはまさにバベルの塔であろう。



（絵： 兼平智恵子）

『爽やかな五月晴れの風に吹かれて』

（2012年5月13日）

今日は朝の爽やかさに唆されて、お犬様のシャンプーを庭で行ってやった。風呂の湯をベビーバスに汲みシャンプーを行ってやるのであるが、確りと濯がないといけないので、子供のプール遊びができる大きさのバスいっぱい汲み置きをするので大変である。もう腰がへろへろである。小さなバスに浅くお湯を入れてシャンプーをしてやるのであるが、もうかなり慣れてきて大人しくシャンプーをされている。一年前まで虐待を受け人に怯えて懐こうとしないお犬様だったとは誰も信じ

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

ないだろう。お湯を張ったベビーバスに座れ、と言えど大人しく座れをし、泡だらけになってもブルブルすることもなく気持ちよさそうにしている。通りがかりの人が覗き込み、何でそんなに大人しいんですか、と声をかけてくるが、犬だつて気持ち良いことが分かれば大人しくしているのだ。窓越しにお猫様がハンモックから見下ろして「私はバスだからね」と言う顔をしている。ドライヤーで乾かしているときなど半分眠っているのだから、相当気持ちが良いのだろう。家の中を動く度に、リンスのいい香りが流れてくる。お猫様ときたら、シャンプーの道具をすべて片付けたのを見て、私のブラッシングが未だだよとやって来るのであった。小生のやることをよく見ているものだ。大したものだ。

常世の国の朗読物語『馬滝』

兼平智恵子

或る人「それは不思議な体験でした。」

『馬滝にいきませんか？』

深夜、あなたから携帯電話にメールが入った。

『馬滝は、幻滝とも呼ばれています。私は、

滝の上流には極楽館があり、天女が住んでいるのではないかと思っています。だから行ってみませんか？』

深夜にあなたから入るメールには、どんな内容でも、私には拒否することは出来ません。許されません。だから何時ものように一言

『了解』と返信を打つ。

そして私は、深いため息とともに、陳腐な一人芝居の呟きの台詞を一人寝の冷え切った布団に聞かすのです。……（馬滝の前文）

今回の常世の国の「朗読物語」の紹介は、石岡市の山々から流れ落ちる三つの滝のうちの馬滝です。小美玉市との境界を流れる園部川の源流とも言われ、石岡市真家地区にあります。

真家山に湧き出る滝、岩肌を伝わって、五段になって落下する眺めは神秘的、「真家の馬滝」ともいわれ滝の最上部が馬のしっぽに似ていることから馬滝と呼ばれているそうです。

常世の国の「朗読物語」

第十話 馬滝

二〇一七年五月二〇日発行

著者 白井 啓治

表紙絵 兼平智恵子

発行 ふるさと風の会

朗読者 白井 啓治
手話舞 小林 幸枝

豊女優の小林幸枝さんが、故白井啓治代表の朗読に合わせ手話で演じ上げる。見事のひとつです。



背景画



馬滝

今回はこの物語の終わりの文もご紹介します。

『のっぺらぼうの馬滝を、のっぺらぼうの二人が滑り落ちたら、止まらなくなってしまう。だから、確りと手を繋いで、ゆっくりとおりにいきましょう。でも、のっぺらぼうの顔に流したあなたの緑の涙は、ふるさとのしよっぱさが感じられて好きです』と

或る人「家に戻ったら、ミミちゃんが机の上に私の面を置いて、じっと待っていた。

『顔が見つかりました。明日は、私の顔で

あなたに逢いにいきます』

私は、大急ぎにあなたにメールを打ったので

した。
そして、『了解』の二文字が送られてきた」

|| 終 ||

不思議な結び……。どうぞふるさと風の文庫でお楽しみ下さい。

ここでお知らせ致します

ふるさと風の会では、六月十一〜十五日迄、石岡市まちかど情報センターにて「ふるさと風の文庫展・風のことば絵同好会展」を開催いたします。

今まで紹介してきた文庫も求めて頂くこともできます。(参考までに、今回の馬滝の文庫は三百円になります)どうぞご来展のほどお待ち申し上げます。

尚、ふるさと風の文庫の一部は四月一日オープンしました八郷総合支所の二階、「郷の本棚やさど図書館」にて見ることが出来ます。ご利用頂ければ幸甚に思います。

最後になりました。是非「馬滝」に行ってみたい方々の為にご案内いたします。

大砂地区にあります「ふれあいの里石岡ひまわりの館」から車での出発です。左折し間もなく十字路信号を左折、すぐの石岡共立病院（元医師会病院）入口を左にして前進、約四分で山崎南交差点、右折して約一分ほどでまたの交差点、吉祥院を右にしながら前進、三分位走りますと、左側に大きめの「大澤山 明圓寺」の看板あり、左折です。ゆるやかなカーブありの道路をゆっくりと進む、途中右折の道路が三か所ありますが、道なりに二分位で下り坂、降りた所右側が明圓寺さんの入口で、大澤山 明圓寺の石碑が立っています。相対して「馬滝0・8km」とかかれた手作りの道

標があります。

間もなく右側に明圓寺さんの駐車場のようない場所がありますが思い切つて車でゆつくりと明圓寺さんの左側を上がつて行きます。舗装されている林道約四分くらいで、車四台位停車出来る広場に到着です。サラサラと滝の音が聞こえてきます。

参考資料 石岡市観光協会

公式ホームページ

○ 密にしてお喋り会？ジャーマンアイリス 智恵子

我が人生の回想4

木下明男

戦中派生まれ・・・？

1943年12月・・・江東区の大島で、二番目の息子として生まれたと両親から聞いている。父親の生業は自転車屋だとか・・・？戦争の記憶は全くなし、ひもじい思いも辛い思いも苦しい思いも・・・。二つ上の兄は、父方姉の田舎（茨城）へ疎開した話をしていた。親戚へ疎開と言うのは肩身が狭いらしい？疎開当家で、兄と同じ年頃の子が何かの加減で、茶碗に吐き出したご飯を兄が食べさせられたらしい？後日兄から真実を告げられ、母は疎開を止め、空襲下の東京で親子4人の生活を決意。借地に10坪ほどの二階家（天井板の上に畳を敷いただけ）、天井は170センチ程の低さ。まるでバラックに毛の生えた程度の家だが、親子4人の生活が始まる。明治通りから奥まった路地裏の家、焼夷弾により数軒先まで火の手が来

たらしい？そんな生活も全く記憶にない、中耳炎を患つた私は父親の背中に背負われ病院通い。その途中に空から爆音が・・・占領された日本の空には爆撃機が（B29）飛んでいた。辛うじてこの記憶だけはあるのが不思議だ・・・。

食料は配給で、必需品は米穀通帳・・・？お使いで、お米やうどん玉等を引換券で取りに行つたのを覚えてる。近くにある小学校（台東区立田中小学校）の教室には生活者が住んでいた。学校の地下空間は防空壕に使われたとか・・・？その頃は、その地下に水がたまり暗闇のブルー状態に・・・当然立ち入り禁止？巷では浮浪者等がたくさん・・・傷痍軍人等も多く見かけた。棒の先に針を付け、道路に落ちていたタバコを拾っている（モク拾い）輩もよく見かけた。ポン中（ヒロポン中毒者）が昼間からウロウロ・・・？青白い顔をした売血生活者も多勢いたようだ。日々の食べ物も、すいとん等も多く食べた記憶が・・・？麦ごはんも食べた、アミの佃煮もイナゴの佃煮も、豚小間と白菜シラタキ、お麩いりの鍋物（すき焼きと呼んでいた）は、大ご馳走・・・。

1946年妹が生まれる、此の頃から断片的な記憶がある。妹の出生届を出しに台東区役所へ、すると役所から二人目のお子さんですねと言われる。空襲で戸籍謄本が焼け、私の戸籍が無かつたらしい・・・。謄本は妹の後に私の戸籍が足されたとか？？？冗談で、お前は橋の下で拾つたと揶揄われた。路地裏の家々は歯抜け状態、家が欠けた空き地は彼方此方にあり、其処には畑が・・・？1948年には弟が生まれる、出産は家で・・・？産気付くと子ども等は二階に追いやられたのを覚えてる。更に1950年には末弟が誕生・・・

家族7人の生活が始まる。母の兄弟は7人で丁度真ん中、子供が生まれなかつた弟夫婦から誰か一人養子をと・・・母は断然断つたようだ。

戦後間もなくは住む家が少ない、父の弟親子が小さな家である我が家に同居。やがて、北区滝野川の都営住宅が当たり引越してゆく。その後、母の姉母子が同居。その母子を訪ねてよく爺さんが泊まりに来る。従弟は爺ちゃん爺ちゃんと呼んでいたが、後日母の話では姉の旦那（生活の保護者）であつたとか？その姉は、戦争で帰って来なかつた婚家から暇を出され、炭屋の裕福な旦那の世話を受けていたとか、そして母の兄弟も恩恵を・・・？戦争の悲劇はこんな処にも・・・？その叔母さん母子も江東区の都営住宅に引越してゆく。1950年小学校入学・・・教室で、DDTを掛けられた。学校では給食が、アルマイトの食器にナミナミと盛られた脱脂粉乳？もやしと野菜のあんかけ風煮物、食べられず家まで持つて帰つたこともあつた。やがて朝鮮戦争が始まり、戦争特需で好景気が始まる。

明治生まれの親父は、太平洋戦争前に召集され中絶・・・？戦争のことは全く話してくれなかつた。母は墨田区辺りの工場（日立）で働いていたようだ？生まれた処（江東区）から、何故台東区に来たのかは覚えていない。それでも、食べ盛りの時期に飢えを感じさせなかつた両親は偉かつた。



【常陸国における親鸞の足跡】(6)

大覚寺・親鸞法難の遺跡

親鸞聖人の関東での布教についてはまだ知られていない事も多い。

石岡にも親鸞聖人ゆかりの史跡や寺が多くある。私もこの地に来るまで、親鸞の関東での布教活動などについて何も知らなかった。石岡市大増にある大覚寺(だいがくじ)には「親鸞聖人法難の遺跡」の看板が掲げられている。

この看板のおかげで、その内容を調べてさらに興味が高まったようだ。

しかし、一般に観光客はお寺と、その京都桂離宮を模した庭園「裏見なしの庭」を巡って帰っていく。「この裏見なし」は一般には庭の周囲殿角度から見ても裏がないという意味だと書かれています。山伏伏円の恨みもなくなったということを表現したと思われまます。親鸞の時代は鎌倉幕府の始まりの頃です。一昔前に、親鸞は架空の人物ではないかとの学会論争が起こったといっています。

それ程、直筆の書物などが残っていないようです。大覚寺のすぐ横の「弁円懺悔の地」や板敷峠の「弁円護摩壇跡」などを訪れる人はほとんどいないというのも不思議な気がします。史跡としての整備がなされていないためかもしれません。



大覚寺遠景

親鸞が常陸国の布教の中心としたのは稲田(現笠間市)の草庵でした。

しかしこの地方には山にこもって修業をして信者を集めていた山伏達がいまいました。その山伏の長であった弁円は日増しに名声が高まっていく親鸞を妬ましく思い、板敷峠のすぐ上に「護摩壇」で護摩を焚いて呪い殺そうとします。そして、この峠を越えて府中(石岡)から鹿島神宮の方によく親鸞が通っていたのを知って親鸞がやってくるのを待ち伏せしました。しかし、待てど暮らせど親鸞がやってこないで、とうとう仲間を集めて稲田の草庵へ押しかけたのです。

自分を殺そうと思ってやってきた弁円を、親鸞は優しく諭しました。弁円は怒りや殺意がたちまちに消えていき、親鸞の教えと人柄に会心し、親鸞の心からの弟子(明法房)となります。

この事件がここであるという大覚寺の法難です。大覚寺の門をくぐると右側に大きな石岡市指定保存樹「ヤブツバキ」と説明看板があります。そのすぐ左に石で組まれた囲いとすぐ近くに古木が天板を置いた状態で保存されています。そこには「親鸞聖人説法石、天蓋樹」の石碑が置かれています。親鸞上人はこの石に腰かけて、辻説法などをしていたのでしょいか。説明はなにもありません。

ここ大覚寺を過ぎて車の通る街道を少し登ったところに茨城県教育長の銘が入った「史跡板敷山」と書かれた看板(石碑)が立っています。

この看板のところの手前を右に山へ入る道があります。これが昔の板敷峠を越える道でした。しかし、この道は整備が不備で藪を漕がねば進めません。しかし入口の横から左の山の中に入れば道は比較的整備され、板敷山の頂上へ続いています。



弁円の歌碑

先ほどの旧道を少し進むと1分ほどで開けた広場のようなところであります。

この広場には「山伏弁円懺悔の地」の石碑が建っています。

歌「山も山 道も昔にかわらねど 変わり果てるわが心かな」
これは弁円が親鸞の弟子となり、各地を布教して歩いていて、この場所を通った時、昔ここで師と仰ぐ親鸞に危害を加えようとしたことを悔い、懺悔をしたといわれています。



板敷山の弁円護摩壇跡

板敷山にはこの弁円の「護摩壇跡」が残されています。ここには下から登ることもできますが、現国道の峠を越えた所から右側に山へ上る道があります。車も入ることができまので一度訪れてみてください。旧道には大きな「板敷峠」の碑もあり、わかりやすいと思います。またそこから山の尾根へ続く道に出られますので登ると八郷の町や加波山の山並みなどが素晴らしい景色が広がります。

共に生かしていく

伊東弓子

増上寺の佛教青年会に毎月出かけて行った若い日、そこにいる私の姿を思い出している。椎尾匡先生「共生」について勉強する集いだった。仕事を始めて間もない時、寺の仕事として使命感をもって真剣だったし、情熱に燃えていた。都会の雰囲気も味わいながら、増上寺という大きな寺で地方から来ていた若い坊さん達と学んだ楽しさを抱えて夜汽車の窓に写る私は「明日からも頑張るぞ」と、自分に言い聞かせていた。

あの時のお話しが心に刻まれ、全ての命が共存共栄している事を一生の支柱として事にあたってきた。今回のコロナと生活の狭間の中でどう生きていくか身近な友と考え合ったりしてはいる。又活動などは場所が閉ざされた各グループは半分以上諦めている。私達「御留川の活動」はどうしようかと岐路に立たされながらも前向きに進めることにして続けている。

身近なところでふるさと再発見をしたい。故郷を見詰め直し“ふるさと良いと発見”ということで季節感を味わいながら歩き出した。

令和二年に「ダイヤモンド筑波」を見ようと前から続けてきたしみじみ村の人達の会に参加。昨年ほそれだけいいのかという疑問に立つてみた。“おらが筑波”という土地、場所から見ると自慢の筑波の山の姿を見ているのだから、それぞれの筑波の山に沈む夕陽がいつ頃、どんな風なのか、あらためて見てはどうかと提案した。特別な反応

はなかったが：：私なりに筑波の山の姿が場所によって変わった。それぞれ筑波の山に沈む夕陽もさまざまだった。

玉里の棚田の早苗も初夏の風に揺れていた。

夏にホ・ト・メの里の山百合が木々の間から漏れる陽射しを受けて咲き出した。草刈りをした道を歩く、靴の感触は柔らかかった。心ない人もいて花を折っていく姿を何度か見たとか。玉造の山百合も集まってくる人々の心なから酷い痛手を負ったらしく廃止されたそうだ。人間に過剰サービスは禁物、只は駄目、観光地になり過ぎない。など多々考えないとだめだ。ホ・ト・メの会の人達の年令も大分高くなってきたとか、会員募集中とか、会の活性化のために他の会との交流や一人が一人を声かける努力もし続けたい。

夏から秋にかけて公けの催しも省かれていた。“自分達で敬老会”をもとうと決めた。自分達で自分を祝ってやろうと、題して昼食を主にした。いづみ荘さんの配慮の細かさも自然体で有難かった。食事だけで終わらせるのも：：と思っていたが自然と話しが出てきた。顔見知りばかりだが、自己紹介し合い、仕事のこと、現況を語り合う形になった。今からでも遅くない、一人一人をより理解し合える機会にもなり、絆も強くなってお互いを支え合っていく出発の日となるだろう。

かすみがうら市歴史館で“小林恒岳”先生の展示会があり、御留川時代とは違うとはいえ、堤防の出来ない時期から、顔も姿形もかえた様子をカインバスに描いた作品の一つ一つを見せていただくことはよかった。空が森が水面が、魚や鳥が当時の様子を描かれていた。漁人や地域の人々の声が聞こえてくるようだった。自然体の湖の頃、各河川

から押し流されてくる汚物、公害、そして堤防が出来て、逃げきれない溜まり水となった姿を小林画伯が絵の中に表現し、小池さんが写真を通して訴えてくれているようだ。芸術を通して感動した思いを将来につないでいくのが作品を見せていただいた私達の仕事としていかなければならないように思える。

会員さんの中には、特技をもった方が多くいらつしやる。宮地久子さんは彫刻の専門家、二科展の会員さんから上の方へ上がった。東京までは行かれなかったで、ご自宅のアトリエへお邪魔した。奥の方には大きめの作品、お茶を頂いたころには、小型から中型の彫刻が所狭しと、座わり、立ち、横になって私の話に耳を傾けているような「早くお嫁に行ってほしいけど……」と、先生は苦笑いされた。一昨年前は二科展に行く途中、運搬中に壊れたとのこと、どんなにかお辛かったことだろう。その屈辱を越えられての作品「月光」だった。五人の乙女達、表情・姿形は地上で繰り返される争い、それを止められない人間の性を大きな力の宇宙がみつめている。

月の光りは乙女達をやさしく包んでくれているようだ。又今年も人の性を表現して下さる作品が出来ること願って沖洲の坂を下りてきた。

梅が一輪、二輪と増え始めた頃、高浜の東に生まれた古本屋さん、前々から高浜の人達が考えていた思いが通じたようにも思える。一人勝手かもしれないが名前がいい「縄文みずいる文庫」。前からあった縄文の名、みずいろは御留川の色に通じる。新しい仲間も出来て文庫内に入る人、外でお喋りする人、お互いに入り気を使いながら進んでいた。

四月一日は、木下さんお勧めで八郷支所の三階に新しい図書館が出来たので開館日に参加した。高浜に生まれた文庫から恋瀬川、八郷の図書館の前の田を水源まで続いている。否八郷の山が源で平地の田をうるおし或時は氾濫し、高浜まで続いていく。三階を広く使ってガラス張りの明るさ、八郷の西の山々、東側に続く流れ、水田一年を通して移り変わる景色も一つ一つが心を癒やしてくれることだろう。学習するコーナーでは、小中学生が席をうめていた。館内所々ソファがあつて、足の痛い者にはやさしく感じた。カフェは時間に制限があつて利用できなかった。一般の人公開初日、人の出入りは多かった。石岡市は湖から平地そして山あり、その台地で歴史が紡がれてきたことだろうと思ひながら帰ってきた。

冬時の催しの際、暖かくなつたら、おにぎり持つて歩きたいと要望があつたのを思い出し、花も終わり近い頃、声をかけた。高浜ハイウェイを歩きた恋瀬川堤防に向かったが、木々に花がない、木の膚の色が悪い、皮が委縮している。花は枝先端にちらほらとついている。期待外れもいとこ。

皆さん不満もいわずに病める木を思つてか、広げかけた握飯しを背負いなおし、玉里の堤防に咲きほこつた菜の花を眺めようと八木に向かった。三ツ谷の堤防から平山、大井戸の菜の花の横一直線を描くように黄色がはつきり見えた。高崎方面は播き時が遅く芽が出ても育たず、花はもつても地面すれすれの所で咲いていたから、遠くからは見えない筈だ。歩崎まで足を延ばしてくださつて一寸した旅行気分だった。公園内でお握りをほおばつた。美味しかった。久しぶりの人の参加もあつて賑わいが増しているように思えた。帰りの道は

土浦入り江側、出島の南西の古い道を行った。Nさんが若い時代、子供達との思い出の話しを聞きながら、いいおやじになり、おばさんになって各地で頑張っているだろうと教え子さん達を思っていた。お互いの人生を知ってほしいと思った。以上、幾つかの活動を内心配はあつたが、続けてきた。この間、コロナにかかった人はいない。かといつて自慢する訳でもないが、若い日に感動した「共生」共に生き、生かされるこの信念は私の人生の支えでもあつた。これからも私とあなた、草と私、虫と私、共に生命つきるまで確りいきたいものだ。

合併して十八年めに入った今、玉里にも勿論、小川にも美野里にも知り合いが増えた。

玉里御留川研究会も十年めに入った。羽鳥駅の前に「美野里ともいきプラザ」というカフェがある。この店を発見した時は感動的だった。「共生」についての説明文が確りと椎尾匠先生の紹介をしている。

五月末、「二百円でバス旅行」と題して参加者をつのつて行こうと思う。



鹿島海軍航空隊基地跡

小林幸枝

風と共に

《理》(23)

大輪啓展

週末に良く晴れてとても気持ちが良いので、美浦へ出かけてきました。

「美浦村週末カフェ」に行きたいと思っていたのですが、コロナの為に、しばらくの間休業になっていました。とても残念でした。

このカフェは「鹿島海軍航空隊基地跡」のすぐ近くにありますが、この中には入れず、外から見ただけででした。

今度、美浦村役場へ旧鹿島海軍航空隊庁舎・貴構見学会の申込みをする予定です。

鹿島海軍航空隊は、戦時中、大日本帝国海軍航空隊の部隊の一つで、当初は主に水上機の訓練を行っていましたが、太平洋戦争後期になると、劣勢となった大日本帝国が本土防衛のために必要な防衛場所として定めた「絶対国防圏」が策定される(1943年9月30日)とこの航空隊は日本本土防空部隊となりました。

そして戦争末期には特別攻撃隊(特攻隊)を編成し、沖縄戦において特攻作戦に従事したそうです。

この元鹿島海軍航空隊跡地には、水上機着地用スリップ跡、鹿島海軍航空隊記念碑、鹿島海軍航空隊・航空機射出装置カタパルト跡などが、現在も残されているそうです。

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「器」

日本の四季について、妻とも良く話しますが、春と秋はどこ行った？

暖かくなってきたなと思いはじめると、すぐに暑くなって・・・

暑さが和らいできたなと思いはじめると、すぐに寒くなって・・・

丁度良い気温・湿度、春と秋が長ければ良いのになあ、と。

皆さんも季節の変わり目には、体調管理に十分気を付けて行きましょう。

器、

形あるものとしても、形なきものにも、その容量ごとに大きさが有り、その範囲を超えてしてしまえば、当然溢れ落ちていきます。

まさか、ここで形ある器の話をする訳にはいきませんから、今回は皆さんの中にある器について、少し。

皆さんは自分の器について考えた事はありますか？

大きさや深さ形等様々でしょうが、実際見えませんから、どの様に想像しても正しく理解は出来ませんよね。

誰かと比較するのも多数の意見があつて成立する事かと思いますが、当然人の上に立つ人間であれば、その器は大きければ大きいほど、深ければ深いほど良いのでしょうか。

ですが、器が仮に大きくても、それが正しく機能していなければ、無用の長物となってしまいます。だからこそ自分を振り返る意味でも、一度自分信はどんな器なのかちゃんと理解して行く、本当はこの様に出来たはずが、勢いに任せてあの様な行動を取ってしまった、
或いは、本当はここまでが限界だったのに、背伸びしてここまで請け負ってしまった。

皆さんにも何かしら当てはまる事があるのではないのでしょうか。

特に周囲の期待を感じたり、成功を夢見ていたりすると、普段とは違った行動をとってしまうがちです。

器、それぞれの大きさ深さは、ずっと変わらぬのか、変化させる事は出来るのか、皆さんはどう考えますか？

私はこう考えます。

初めは小さく浅く、個人の成長と共に大きく深く、勿論個人差はありますし、世間通念上有能とされる人達は他に差を付けて持っているのかもしれない。

ですから、誰にでもチャンスはあるんですよ。
今まで様々な事を述べてきて、分かっている方も
いらっしやるでしょうが、如何にしてそこに気が
付くかって事なんです。

書いてみると簡単な事に思えますし、実現してき
ている人達にとつてもそう難しい事ではない様に
思っている筈です。

他者が気がつく事が出来ない何かに、どの様にし
て気がつく事が出来るのでしょうか。

それは、
まず一つ、

観察する事ですよね、日々の何気ない事象から、
道を歩く人・動物・植物・昆虫・

自然、閃きは何処に隠れているか分かりませ
んよ？

そういった僅かな違和感を具体的に想像する事、
それを実行に移す事は初めの一步となるでしょう。
二つ目、

興味を持つ事、前段で述べましたあらゆる事象に、
自分に合った何かを深く追求して行く、そんな事
から、大きな成功に繋がって行くのではないでし
ょうか。

最後に、
私としては、私なりの持論に基づいての事ですか
ら、

とにかく、面倒だと思わず、様々な事に思考を巡
らせるって事をしていただきたいなと、そんな風
に思っています。

今の世の中、どうしても人と比べてがりますが、
然程重要だとは思いません、自分なりの道を未来
を見据え現実に変えて行く努力をし続ける事こそ、
余程重要だと私は思います。

今の自分を見つめ直し、自分の望む姿からしてど
の位置にいるのか、器量を増やしてこの先どの様に
進むべきか、自分自信だけで判断出来なければ、
信頼できる誰かに頼りながらも、
答えを探して欲しいと思います。

それではまた来月に。

新たな挑戦 15

菊地孝夫



〈承前〉

前号に引き続き、ふとひらめき、思いついたこ
とを、ここに書いてみることにしましょう。先月
号では、もったいぶって書きましたが、その中身
はと言えば、いたって簡単なことなのです。

「手品の種明かし」と一緒に、わかってしまえば、
「なーんだ」と言われるに決まっていますので、ほ
んとうはここでは言いたくはないのですけれども、
「ある国家資格試験に挑戦する。」という筆者の決
心のことです。

仮に、この試験に合格したとすれば、一気に、
ある程度の収入を得ることが可能ともなり、現在
の「どん底貧乏生活」から脱却することが出来る
かもしれません。それには、もちろん、専門分野
の勉強をしなければなりません。

最低限、物理学、数学、関連の法律知識、など
が、要求されます。また、当然のことながら、か
なり高度な、専門知識が必要とされます。

少し調べた範囲では、最高齢合格者は、72歳
とこだわったそうです。

実際に合格して、社会において、復職して、活
躍が始まったのは、「後期高齢者」と言われる、7
6歳であったということです。その方は、テレビ
局の取材も受けています。現在も、某所で芸員
として活躍されているというこころらしいです。

いま人気の、国家資格のひとつでもあるせいか、
多数の志願者があり、老若男女を問わず、高い競
争倍率になっているらしいのです。聞いたところ
では、4〜5%の合格率であり、相当の難関でも
あるらしいのです。

もしも私が合格すれば、たぶんそれに次ぐ、高
齢合格者ということになります。

ひよつとすると、マスコミの取材を受けて、テ
レビ画面に登場するかもしれません。

早速、本屋に飛んで行って、いつもなら立ち読
みで済ませてしまうのですが、今回は、案内本を
購入しました。

田舎の悲しさで、三冊は必要なのですが、たつ
た一冊しか手に入りませんでした。

しかも、奥付けを見ると、どうやら特定の、「受
験対策塾」のようなものへの勧誘が書いてあり、

私がつとも知りたかった受験申し込み手続きはどこにもない有様でした。

しかもかなりの定価で、

「しまった、やつちまった。やれやれ。」という思いです。今更、金を返せというわけにもいかず、

「こうなったら、もとをとらなきゃあ。」

と、決心した次第です。

8月に試験があるので、頑張らないと、ね。

ここで、もしもの話をしても、しょうがないので、話題を替えましょう。

今、この「ふるさと風の会」は主力メンバーを失い、もう一人の、打田御大も、ひぎの故障により、半年余り原稿が書けない状態です。はつきり言つて、会の存立自体が危ういという、大袈裟ではなく「崖っぷち」の状態になっています。

印刷製本などの作業も、ようやくと言つたところであり、もしも現在使用している、中古の「高速印刷機」が壊れたらば、高価なものであるために、買い替えは不可能であり、それだけでもアウトな状態なのです。

複数の読者からの有り難い寄付などによって、現在のところは、かろうじて運営できているという有様なのです。

このままいけば、一年もたたずに、物理的・経済的に確実に「破断点」がやってきます。

それかといつて、公的な資金援助や、広告などを載せて収入の増加を図る。あるいは、会報の有料化などといった変更には、私個人としては反対なのです。設立者の白井氏の、趣旨にも反する気

がするのです。

正直なところ、新規会員が増えなければ、自動的に消滅の危機にあると言えます。大輪氏の参加があつただけです。

筆者も、機会あるごとに「風の会」への勧誘をしたつもりですが、残念ながらメンバーを一人も勧誘できませんでした。

過去には、白井代表のポケットマネーで支えられていた部分もあつたようです。

よほどのことがない限りは、残念ながら隔月刊・旬刊あるいは、休刊か、廃刊となつてしまうでしょう。

活字離れが進行中の現代で、それもまた、一つの時代的運命、あるいは選択肢であるのかも知れませんが。

そろそろ20年に手の届く「ふるさと風の会」なのですが、メンバーそれぞれが、各々の道は進むという選択肢もありますしね。



城県の難読地名とその由来 (23)

木村進

狸穴、狸洩、東猫穴町、貉谷津

狸穴 【まみあな】

稲敷市、つく

ばみらい市

狸洩 【むじなぶち】

つくばみらい

市

東猫穴町【ひがしまみあなちよう】牛久市

貉谷津 【むじなやつ】

ひたちなか市

同じような意味で使われているタヌキやムジナなどの動物名の地名です。

狸 … タヌキ

猫 … マミ (魔魅)

貉 … ムジナ

さて、この3つの動物の違いが分かりますか？

一応は漢字としては違いがありますが、地名は全く混同されています。

架空の動物も人をだます動物としては同じようです。

猫⇨マミ⇨魔魅 の説明を「Wikipedia」から引用すると、猫(まみ)はタヌキまたはニホンアナグマのことを言う。

民俗学者・日野巖による『日本妖怪変化語彙』によれば、マミはタヌキの一種とある。一方で江戸時代の百科事典『和漢三才図会』では、「猫」は「狸」とは別種の動物として別々に掲載されている。同書では中国の本草学研究書『本草綱目』からの引用として、山中の穴に住んでいる肥えた獣で、褐色の短い毛に体を覆われ、耳が聞こえず、人の姿を見ると逃げようとするが行動は鈍いとある。

江戸時代にはこの猫、狸、そしてムジナが非常に混同されていたが、これはアナグマがムジナと呼ばれていたところが、アナグマの外見がタヌキに似ており、さらに「貉(むじな)」の名が日本古来から存在したところへ、中国で山猫が「狸」の名で総称されていることが知れ渡ったことから混乱が生じたものとされる。

西日本に伝わる化け狸・豆狸は、この猫のことだともいう。また江戸時代の奇談集『繪本百物語』によれば、猫が老いて妖怪化したものが同書にある妖怪・野鉄砲とされる。同じく江戸時代の随筆『耳囊』3巻では、江戸の番町に猫が現れたとあり、体色は鼠色、目は太陽か月のようで、杖でたたくとガマガエルの背のような感触だったという。「まみ」の発音が似ていることから、人をたぶらかす妖魔、魔物の総称を意味する「魔魅」の字があてられることもある。と書かれている。

東京都麻布狸穴町(まみあなちよう)の地名由来はいろいろ書かれているものがあり、引用してみたい。

(由来1) 坂の下に狸やアナグマなどの住む穴があった。マミIIアナグマまたはタヌキ

(由来2) 木立がうっそうとして、いまにも魔魅(まみ・人を惑わす魔物)が出そう。

(由来3) 「ままあな」に由来する。「まま」は「急斜面」で、「あな」は「窪地」を意味する。

(由来4) 間府・まぶ(鉱石を取るために掘った横穴、坑道)に由来する

といういろいろな説が書かれていたが、やはり(一)の説が強いようだ。

★狸【タヌキ・ムジナ・マミ】の付く地名
・タヌキ名

秋田県にかほ市象潟町狸森(たぬきもり)
・ムジナ名

山形県上山市狸森(むじなもり)

福島県須賀川市狸森(むじなもり)

茨城県つくばみらい市狸淵(むじなぶち)

群馬県邑楽郡邑楽町狸塚(むじなづか)

・マミ名

茨城県稲敷市狸穴(まみあな)

茨城県つくばみらい市狸穴(まみあな)

東京都港区麻布狸穴町(まみあなちよう)

★貉【ムジナ】の付く地名

茨城県ひたちなか市貉谷津(むじなやつ)

埼玉県比企郡川島町上貉(かみむじな)

千葉県旭市貉野(むじなの)

★猫【マミ】の付く地名

茨城県牛久市東猫穴町(ひがしまみあなちよう)

栃木県宇都宮市満美穴町(まみあなちよう)(参考)

このように「狸」と書いて「タヌキ」「ムジナ」「マミ」と3通りに読まれています。

ただ、「貉IIムジナ」地名については、動物のムジナ(アナグマなど)が地名になったという説はあまりあつていないようです。

この地名の解釈はどこの山の沢のようなどころにつけられている場合が多く、ムジナII「むじら、むじりとる」と言った意味で、山肌を削って川が流れているような地形が語源となつていると考えるのが一般的ようです。石岡にも八郷地区に「貉内」という大字名がありました。現在は「龍明」に変更されています。

最後に、実際に最高裁まで争われた「たぬき・む

じな事件」を紹介しておきましょう。
事件は、1924年(大正13年)に栃木県鹿沼市中で発生した狩猟法違反の事件です。

(事件の経緯)

被告人は1924年2月29日、猟犬を連れ村田銃を携えて狩りに向かい、その日のうちにムジナ2匹を洞窟の中に追い込んで大石をもって洞窟唯一の出入口である洞穴を塞いだ。被告人はさらに奥地に向かうために直ちにムジナを仕留めずに一旦その場を立ち去った。その後3月3日に改めて洞穴を開いて捕らえられていたムジナを猟犬と銃を用いて狩った。

警察はこの行為が3月1日以後にタヌキを捕獲することを禁じた狩猟法に違反するとして被告人を逮捕した。下級審では、「動物学においてタヌキとムジナは同一とされている」こと、「実際の捕獲日を3月1日以後である」と判断したことにより被告人を有罪とした。だが被告人は、自らの住む地域を始めとして昔からタヌキとムジナは別の生物であると考えられてきたこと(つまり狩猟法の規制の対象外であると考えていたこと)、2月29日の段階でムジナを逃げ出せないように確保しているのがこの日が捕獲日にあつたと主張して大審院まで争った。

(大審院判決)

タヌキとムジナの動物学的な同一性は認めながらも、その事実は広く国民一般に定着した認識ではなく、逆に、タヌキとムジナを別種の生物とする認識は被告人だけに留まるものではないために「事実の錯誤」として故意責任阻却が妥当であること、またこれをタヌキだとしても、タヌキの占有のために実際の行動を開始した2月29日の段

階において被告人による先占が成立しており、同日をもって捕獲日と認定（つまり狩猟法がタヌキの捕獲を認めている期限内の行為と）するのが適切であるとして被告人を無罪とした。（Wikiより）



【風の談話室】

《読者投稿》

おすすめの本 15

燕石

今月は、趣向を変えて、ルポルタージュものを選択してみました。

結論から先に言うと、なかに書かれた当事者の一人としては、産経新聞社の取材力はこの程度のものか、という思いです。あるいはやっぱりな、という思いです。

明らかな事実認識の誤りが多くあり、また、私が多時間の無駄だとして、手に取らない多くの三流のルポルタージュ物の一つです。ですから、決して「おすすめ本」ではありません。

文章力も、新聞記者にしては、「はてな？」と首をかしげたくなるレベルで、きちんと「裏どり」をしたものなのか？と云わざるをえません。わざわざお金を払ってまで購入するほどの価値のあるものではありません。

実を言うと、高浜に最近開店したばかりの、「縄文みずいろ文庫」という古本屋さんで、面白い劇画

本を見つけて買ったのですが、ばらパラめくってみたら、私がずっと以前から持っているものだったので、同じ値段の別な本と取り替えて貰おうと思いい、店主さんに言ったら、二つ返事で、「いいですよ、」と、こころよくいっていただけだったので、本棚の中から、目についた二冊の文庫本を取り出したのでした。

一般的には、50年以前の事柄は「歴史」ということになります。つまりは、明治維新などとおなじ様な、古い過去の出来事ということです。あの時代は、「政治の季節」、とも呼ばれていました。

総括せよ！さらば革命的世代

今では考えられないほど、政治的な、あるいは社会的な言葉が日本中を飛び交い、日本は戦後復興を経て見事に立ち上がり、高度経済成長を遂げ、例えば、「マイカーブーム」と言って、一家に一台の車があるのが、さほど珍しくもなくなった時代でした。

産経新聞取材班、

潮書房新光人社

産経FN文庫 2018・11・21 1刷

給料は毎年々々何割か上がり続けて、二十代の若いあんちゃんだって、中古車なら買えるという時代でした。車を持っていないと、まともにデートもしてもらえないほどでした。

但し書きには、

私の廻りの者たちは、仕方がないので、せつせと自動車教習所へ通っては、なけなしの小遣いを払って、免許を取ったものでした。

と有ります。

器用な奴は、「二発合格」といって、いきなり本試験が受けられて、何人かはそれで運転免許を取ったものでした。

取材が始められたのは、その数年前になるかと思われるので、2008年前後になる。

大学進学率も、飛躍的に伸びて、全国平均が15パーセント近く行っていたようです。その何割かは、奨学金を貰い、アルバイトをしながら、ほとんど自力で卒業しました。

あとがきには、2008年5月から2009年6月にかけて産経新聞大阪社会面と、インターネットの産経ニュースに連載された、「さらば革命的世代」を大幅に加筆したものと有ります。

この石岡でも、中学の同級生のうち、1割ほどが大学や短大・専門学校に進学をしました。

つまりは、いまから14年あるいはそれ以上の時を遡らなければ、なりません。

現在は、4年制大学への進学率が50パーセントを超えているでしょう。短大などを含めたら、八割近いのではないのでしょうか。

実際のこの世代、いわゆる「団塊の世代」が登場し、世間に衝撃的なさまざまな事件を起こしたのは、現在からだにとさらに50数年の時を遡らなければならなくなります。

「政治の季節」

主に、大学の学生による、全共闘運動が最も燃え盛っていたのは、1968年からとなります。いわゆる、70年安保。または学園紛争と呼ばれた急進的な闘争運動が燃え盛ったのは、70年前後の数年間でした。

その10年前の60年安保のときは、60年6月15日の日米安全保障条約の延長決議が、国会で強行可決されると、それまでは反対をして全国で大変な勢いで盛り上がっていた、労働者・学生・文化人・市民などの多くが、反対運動から離れていき、あれだけ急進的な行動により、あわや、自衛隊の治安出動か？という話さえ出るほどのものであり、下手をすれば、現職総理であった、岸信介氏、

〈安倍元総理の祖父。連合国主導の極東裁判に於いてA級戦犯として死刑判決。のちに、取引により減刑、釈放。〉の首さえもが、危ういと言われたほどのものでした。しかし、60年を境に急速にこの運動は急速に、鎮静化をしました。

この時は、参加した、東大の女子学生の中から死者が出て、さらに運動に火をつける結果ともなりました。

この運動に関連して、国内ではいわゆる「進歩的文化人」というものが登場しました。

当時、急速に拡大したマスメディアの需要に対応して、これ等の人種が必要とされたのでした。それまでの評論家とは異なり、実際の行動が伴わないと、評価されませんでした。

パリのシャンゼリゼ通りのデモに端を発したフランスの学生運動の動きは、瞬間に世界中に広がりました。

既存左翼政党の枠を超えた、新たなうねりでした。アメリカでは、大規模なベトナム反戦運動へと発展していきました。隣国、中国では、文化大革命の号令のもと、紅衛兵の青少年少女たちが大暴れました。

これら20世紀後半の動きは、人類史的にも新たな動きだと言えるでしょう。



やまご暮らして (63)

さと女

三寒四温・・・暖かい日が続き、今にも桜の開花と思ったら、突然の寒波がやってきた、おまけに大雪。凍り付いた田圃の道が怖いので、竹の師匠の処は急遽休みに・・・？

今年も山菜の季節が、コゴミ・タラノメ・タケノコが採れた！そして、コシアブラ・ワラビなどのお裾分けがたくさん・・・。てんぷらや煮物、混ぜご飯やみそ汁に、春の香りが食卓に満載。

・春爛漫・・・今日の散歩は1万歩超。途中ヤ

ギさんにおやつをあげたり、花々を眺めたり、膨らみ始めたらの芽をさがしたり、いつとき嫌な事も忘れる。豊後荘病院周辺は、桜が真っ盛りで・・・枝垂れ桜もまもなく咲きそう。

・不思議なご縁でのつながり。『イチゴ屋』さんから連絡が・・・？木下さんと知り合いのお客さん(楽市さん)が訪ねてくると・・・？あたたかい暮らしやすい場所づくりに協力して欲しいとの提案が・・・。これからは生き方改革だご主人・・・ステキな空間になるといいな。

・その楽市邸へ久しぶりの訪問(コロナ禍で2年ぶり)。楽市邸は花盛り、庭を散策し、花々に囲まれてコーヒーをいただき久々にいろいろお話を。社長は相変わらず忙しく庭の改造中。

・ある暑い日、フラワーパークで竹の風鈴作りに参加。たくさんさんのランに囲まれた場所でのワークショップこんな贅沢いのでしょうか。あらかじめ用意された竹にたこ糸を通し、3本組み合わせたワツカにつけ1時間ほどで出来上がり。カラコロと心地よい音がします。さっそく軒下下げました。3本の竹筒の間にも小さな竹が吊してあるので風が吹くと、ぶつかりあい乾燥したカラコロンというような音がします。

・我が集落の柿農家さん、旦那が亡くなっても数年1人で頑張ってきた。近頃は、手が痛くて柿の世話が出来なくなり、とうとう柿の木を伐採してしまった。先日散歩中、伐採した木いる？と声がかかりさっそく取りに行った。きれいにまとめ

とてくれている木を運び、ストーブに入る長さにチェーンソーで切る。作業はまだまだ終わりそうにない。大事な柿の木、乾燥させストーブに使わせて貰います・・・感謝！

・昨日の蒸し暑さ、今朝の寒さ・・・体が必死でついていきます。朝食を済ませた後、夫が突然に見えなくなる・・・暫くして9時頃ニコニコして帰ってきた。ほら、とポケットからたくさんわたらの芽を取り出した。もう最後だろうと、聞けば裏山を徘徊していたらしい。今晩はわたらの芽ご飯でも、胡麻油の風味で最後のわたらの芽楽しもう。遠くの友人に、わたらの芽とタケノコの炊き込みおこわ、食べに来て！（写真だけ）

・タラの芽の季節がやってきた。藪をかき分けて探しても収穫は、たったの3個・・・フツクラと膨らむまでにはもう少しかかる。それまで誰にも気づかれませぬように。夕食はわたらの芽といただいたコゴミの天ぷら、春ですんねエ。

・山菜採り名人の山散策に同行。師匠の山は山菜の宝庫で、山菜を採る工具は手作り。鉄の棒2本をカギの手に加工して長い竹に固定。これを持って出掛けコシアブラを見つけるも、残念、木の方が高すぎた。

・午後の日課散歩（山菜採り）に出かける前、特別なおやつは、友人手作りのいちごのムース。気合いを入れていざ藪の中に。今日はF友の助言で、高枝切り挟みを担いで行く。お蔭でけっこうな収穫があり、今日は良い日でした。秘密の場所

のわたらの芽。空高く木が伸びて手が届かない。木の先にはちようど食べ頃のふっくら大きいわたらの芽がついているのに、残念。

石岡地方のよもやま話 木村 進

(11) 八郷盆地

八郷地区はこのあたりでは珍しい山に囲まれた盆地のような地形をしています。昔は山根地区と言っていました。最近つくば山系のジオパーク登録によってこの地域の地図が国土地理院から発売されました。鳥瞰図的な地図で、この地域の特徴がよくあらわされています。まるで火山の火口のカルデラ湖のようです。



いったいこの地形はどのようにしてできたのでしょうか。

ジオパークの説明では

八溝山地の南端部をなす筑波山地は深成岩体が地の変動によって隆起し、深成岩の上の地層もそのまま一緒に隆起し、その隆起の後に、この地形が河川によって浸食されたものだそうです。

八郷盆地は大きく分けて3段の高さに分かれています。

標高50～70mの上層部、27～45mの中層部、12～28mの低層部です。この下層部は恋瀬川の沖積低地です。

大昔は竜神山や富士山などの岩石は筑波山系の岩石と同じかなり古い岩石で、このあたりに海が入り込んでいた時代にはこの竜神山や富士山は島だったと考えられています。



そして、柿岡地区には昔大きな湖（柿岡湖）があったといわれています。そして恋瀬川の柿岡湖の出口には滝があり、その滝が崩れて現在の平野になったとも言われています。

ただこれも何時頃のことかはつきりしませんが、このようなことを考えて、この地形図をながめて

みるのも良いでしょう。

八郷盆地の山の麓は良く朝霧が発生します。

幻想的な風景が今も見られるのはこのような特異な地形が関係しているのでしょう。

八郷盆地では、放射冷却により発生した冷気が滞留し、霧が発生し、その霧が筑波山に添って流れていきます。

(12) 太田三楽齋、秀吉を怒らせる。

太田三楽齋(資正…すけまさ)は戦国末期に石岡の片野・根小屋地区にある「片野城」の城主であった。いまでもこの地にて行われている「排禍ばやし」という祭りは、この三楽齋が禍を取り払うために始めたという。

しかし、この戦国武将のことは、石岡や八郷地区の地元の人々の間であまり話題にならない。

戦国武将としては大きな城は取れなかったし、攻め取った埼玉県の岩付城も息子に裏切られて城から追い出されてしまった武将である。

しかし、これも義に篤く、越後の上杉氏、直江兼続などとの信を貫き、北条氏と対抗したことによる。

行き場を失った山楽齋を北条氏と対抗していた佐竹氏が拾い上げて、常陸で勢力争いをしていた小田氏と対抗するための要所となった片野城へ入れた。そして見事に手這坂で小田軍を打ち負かす大活躍をした。この戦いで小田氏は小田城をも攻略され、佐竹氏に奪われてしまった。

やはり、北条氏との覇権争いで、味方となる兵を大勢集めて大軍で小田原城攻めを行っていた豊臣秀吉に呼ばれて、三楽齋は秀吉に会いに行つた。秀吉に接見した時の話は、元禄年間に書かれた軍

記物「奥羽永慶軍記」に詳しく書かれている。

秀吉はこの常州片野の住太田三楽齋について、東国に隠れなき武勇の老武者であり、天下広しと言えどもいまだに城が採れていないのは不思議だと言った。

そして、今の小田原城攻めのことを聞かれて、三楽齋は天下人の秀吉に対し、臆することなく自分の考えを次のように言った。

「この小田原城は一方を荒海に面し、三方は山に囲まれており攻めるには困難な名城である。またこの城を築いた北条氏康も地の利を得ており、氏康・氏政親子二代の間に八州内の5か国を味方につけている。この城に立て籠もって、中の軍勢が5〜6万にいてもこれから先10年は困らないくらいに兵糧を貯めているだろう。

今のような多勢での力攻めでは、この城を攻略することは到底かなわない。ここは計略をもって、攻め取るのがよろしい。」

と今の城攻めに注文を付けたのです。

すると、秀吉は途端に機嫌が悪くなり、「三楽齋はこの数年北条と戦い、負け続けた。その時から臆病神に取り付かれてしまったようだ」といい、三楽齋はその場を去り、隣りの陣にいた石田三成、増田長盛にむかって次のように言った。

「今殿下に小田原攻めについて尋ねられたので、愚案を申し上げたところだ。この三楽は確かにここ数年北条と相戦ってきたが、その武功は他の者たちと比べて決して劣ることなどない。この小田原城を計略なくして攻め落とすことができたならこの入道(三楽齋)の命を懸けても良い。今私の評判がこのように損ねているようだが、これも卑怯なことは何一つしていない。天運が尽き、

敵に領土を奪われて、今かかる不詳の身となってしまったのは面目ないことだ」

この小田原城攻めは、その後三楽齋の言うとおりの計略で落ちた。

軍記にはこのようなことが記されていますが、この三楽齋がこの時に片野の小さな城にいたのです。これだけの知将と言われていますが、自身でいったように義に篤く、上杉家との恩を最後まで裏切ることはなかったといわれています。

大掾(だいじょう)氏の本拠城である府中城が佐竹氏によって攻め落とされたとき(1590年)、この三楽齋はこの片野城にいました。

しかし、その前に、この大掾氏の間でも血縁関係もありあまり目立つ戦いは仕掛けていません。

府中城が落ちた後、佐竹氏はこの城を三楽齋に預けようとしたといいますが、しかし、三楽齋はもう老骨の出る幕ではないとしてこれを固辞したのです。結果、府中城は佐竹義重の弟の佐竹義尚(よしひさ)に預けられました。

三楽齋はこの翌年静かにこの片野で亡くなりました。太田三楽齋(資正)は太田道灌の曾孫といわれています。



また日本で初めて軍用犬と呼ばれる「三楽犬」を使った事でも知られません。今年はその生誕500年にあたります。

いまでも片野地区の山の中に片野城の跡とこの三楽齋の墓と言われる五輪塔が眠ったようにあります。

下士官の手記 4 燕石（えんせき）

（先月号からの続き）

×月×日。

新聞に大きく載ったことで、看護婦たちの中でも随分と人気があるという。いくら看護婦と言っても、そこは若い娘の事だ。有名人には弱いのだろうか。此処の病棟で撮った集合写真の中では私の顔だけが墨塗りで隠されている。機密だから仕方あるまい。

もちろん、名前は××軍曹と伏せ字になっている。

×月×日。

身体の方はどんどん良くなっている。若い看護婦が、入れ代わり立ち代わりやってくる。「もう少しここに居てもいいかな？」などと考える。

新聞社からは、礼状とともに幾枚かの写真が送られてきた。ついでだから戦地の皆にも送ってやろうか。

×月×日

比較的元気の良い者だけで、隊列を組んで近くの神社に戦勝祈願にゆく。見ていると、付き添いの看護婦が妙になれなれしい男がいた。どうやらこの二人は、できているらしい。若い男女の事だから無理もない。それにしてもうらやましい限り

だ。

×月×日。

面会謝絶状態は相変わらずである。看護婦と軍医以外は会う事もない。掃除婦などもである。軍医も最近は何とんど現れない。病気の原因がはっきりと特定できないせいもあるようだ。

×月×日。

病院の傍らには、神主もない小さな神社がある。非番の看護婦などがお参りしたようだ。元気な患者も看護婦に付き添われお参りする。

×月×日。

故郷から便りがある。父が死んだという。こんな状態では帰ることもできない。母はもうずっと前にあの世に行ってしまった。実家はずっと年の離れた兄が継いでいる。帰れない旨を書いて、書留とともに送った。暫くしてから、写真と便りが届いたが、その時はもう最前線で、激戦のさなかだった。

×月×日

相も変らぬ退屈な日々である。通信の教本や、暗号解説の手引書などを読んでいる。夕方、見習看護婦が泣きながら駆け込んできた。空いているベッドに体を投げ出し、泣いている。何時も来ている看護婦の一人で、何時かのバナナの時など真っ先に手を出して、先輩の看護婦に叱られていた。私から見ても、少し落ち着きのない性格で、しよつちゆうものを落としたりひっくり返したりしている。その度に先輩たちから注意されている。

食意地だけは張っているので、白衣がはちきれんばかりの体をしている。何も言わずにいると、ひとしきりすすり上げていたが、気がすんだのだろうか、のろのろと起き上がって出ていこうとす

る。

「おい」

と呼びかけて、部隊から送られてきた見舞いの月餅と紅白餅を差し出した。

「ここで食べて行け」

と手渡した。

「みんなには内緒だぞ。」

と口止めをした。幾度も礼を言って座って食べた。ラムネもあったので、手渡した。ポツリポツリといきさつを話し出した。いつものように、つまらない失敗をして、

「貴女は此処の海軍病院の面汚しです。」等と叱られたという。

「家がお金持ちだから、ここに入れたのよ。」

「大病院の娘だからって、いつもいいものを着てるし・・・」

ここぞとばかり、有ることないこと、さんざんに言われたのだという。中にはやつかみもあったのだろう。

もしかすると、人気の患者の担当に加えられたことも原因なのかも知れない。すっかり食べてしまつと、笑顔になっていくども礼を言つて出て行った。

×月×日。

食事が十分摂れる様になると、聊か困ったことが起きた。

頻繁に夢精するようになったのだ。それもどういうわけか、相手の女は例の敵しい看護婦長である。この年になるまで碌に女性の経験は無かった。機会は幾度も有つたのだが、商売女と関係は持ちたくはなかった。

×月×日。

友人たちの何人かはとくに「筆おろし」も済ませたと言っていた。眼鏡の奥の瞳に見詰められ乍ら、柔らかい手でやわ、やわと***を扱かれる。それこそあつという間に射精してしまう。友人達にさんざん聞かされた体験談が、意識の中に在ったのだろうか。

×月×日

朝になって下腹部がひんやりとする感触で目覚める。

「あつ、またやってしまったのか、」とがっかりする。年の若い可愛い看護婦がよりどりみどりで沢山いる中で、よりによってなんでまた、あの看護婦長なのだろうか？手足がろくに動かないので、自力ではどうにもできない。

×月×日

舞朝の検温と同時に毛布が捲られ、濡らしたタオルで体中を拭かれる。下腹部には、明らかに今朝の痕跡が残っている。ベテラン看護婦は平気な顔で仕事を済ませるが、見習看護婦の中には顔を赤らめる者もいた。件の泣き虫の見習看護婦も、泣き顔を見せてから、それまでは全く平気で拭いていたのに、どうしたものかかすかに震えて、真っ赤になっている。

指導役の看護婦からは、

「貴女、何をしているの！」

厳しい叱責の言葉が飛ぶ。

「そんなことで帝国の看護婦といえますか！」

「・・・」

「兵隊さんたちは、命がけで戦っているのよ。このぐらいの事が出来なくてどうしますか！」

涙顔で、諦めたように体をふく。廻りに控えている新米たちも、縮こまって聞いている。

「あなたたちも、よく見ておきなさい！」

(こりゃあ、おそろしいな。くわばらくわばら。) どうやら私は格好の教育用の実験台にされているみたいだ。

×月×日

こっちは相変わらず、殆どベッドの上だ。隔離病棟からは一步も出られない。傷病患者の大半は、各地の病院に転院していった。正月休暇で、看護婦の半数近くが、入れかわり休暇で家に帰っている。

それでも静かな隔離病棟は、尚更シーンと静まり返っている。

×月×日

おせち料理も形ばかりの物が出る。たまに手に入る新聞はどれも、大陸での華々しい戦果を伝えている。見出しはどれも大袈裟だ。実際はもっと悲惨なことも起きている。その証拠に、衛生兵がみんないなくなった。前線の野戦病院へとおくられたのだ。

×月×日

くだんの看護婦たちは、私たち二人のことに気づいているのか、いないのか、相変わらず暇さえあれば病室に押しかけてきては、無駄囁に花を咲かせている。私に対しては、すっかり気を許している。

こちらが年が若いせいもあるのだろう。

「軍曹殿には、奥様がいるんですか？」

「そんなものはいやしないよ。」

「でもこんなに若い軍曹も珍しいわよ。」

「誰か決まった方はいないのですか。」

「今のところはね。」

「あたたしたちのうちだれか、いい子はいません

か？」

「残念ながら、一人もいないよ。」

「もしかして、女が嫌いとか？」

「いい加減にしろよ。」

「怒ったあ。怖い。」「きやあ。」

と笑いあっている。

「貴女、この前来た、兵隊さんに聞いたら、この軍曹さんほとんどもなく怖い人らしいわよ。」

「嘘だわ。優しいじゃない。」

「あたしも別な兵隊さんから、聞いたわ。鬼隊長だと有名なわ。」

「ほんとですか？」

まじまじと顔を覗き込んでくる。

「ああ、ホントだ。敵には容赦はしない。」

「でも、あたし達は味方でしょ？」

「如何だかわからんな。食い物もみんな食っちゃまうし。」

「それは、日子とかだけよ。」

「でも、そういえば随分と食べてしまったわね。」

「ああ、もう聞いてられないわ。」

「あらそう、じゃああつちに行きなさいよ。」

「お前たちこんなところで喧嘩なんかするなよ。」

×月×日。

それほど時間もかからずに、外泊許可が下りた。そろそろ退院の日も近いので、体を慣らしておくようにという事だ。体力はもうすっかり元に戻っている。

差し入れも豊富にあり、働いているわけでもなから、元気があり余っている。

×月×日。

大陸の戦線は、さらに拡大しているようだ。増援の部隊が続々到着する。

欧州でも大戦が勃発した。ドイツ軍の機甲部隊が快進撃を続けている。

イタリアとドイツとは同盟国なのである。日独伊三国同盟だ。たまに読む新聞に出ていた。

ムソリーニとヒトラー。これぐらいの名前は子供でも知っている。

その前には、ヒトラーユーゲントというものが来日して、日本各地を回った。

どこでも大歓迎されて、「ヒトラーユーゲントの歌」なるものまでできた。

「暴支膺懲」が最近のスローガンだそうだ。

×月×日。連日のように傷病兵が入院してきて、看護婦たちは大忙しだ。

入院してきた兵士らに大陸の様子を聞く。

×月×日。通信本部から命令が来て、至急原隊に復帰せよという。

まだ治りきつてはいないが、院長が邪魔ものわたしを排除するために、任務可能と返事したのだろうか。

あるいは、激戦が続き、兵士が足りなくなってしまうのか。特に通信兵は一般の兵士と違って、一朝一夕に作れるものではない。

×月×日。まるで「女護ヶ島」のようだったこの病院に別れを告げ、軍服に着替えて病院を後にした。

軍港まで見送りに来た5、6人に、別れ際に、「何かあつたら連絡をよこすように」

と言いついて輸送艦に乗った。艦内は最下層の船室から上の方まで、兵士でいっぱいだった。兵士の多くは、荷物と一緒に寝ていた。私は士官扱

いで、尉官3人と一緒に船室だった。

(続く)

【特別企画】

打田昇三の太平記(21) 巻第九2

○足利殿、大江山を打ち越え給う事

主戦場となる大手口の合戦は早朝から始まって其の喚声・罵声は東西に響き渡っていたけれども、足利軍が担当する裏口・搦め手はお客さんとなる敵も少なかったので、尊氏は桂川に降り立ち酒盛りで暇つぶしをしていた。其の中に報告が来て大手口で幕府軍が負け、大将も討たれた…という。

其の知らせを受けた尊氏は、此処に居ても仕方が無い…と山越えて丹波路を西に向かう事にした。従う軍勢も其の通りにすれば良いのだが、中には不審を抱く者も居て備前国の中吉十郎が、顔見知りである摂津国の奴可(ぬか) 四郎に相談をした。

「…どうも不思議でならないが、大手の合戦は今朝から始まったと言うのに、搦め手の我々軍勢は大将が朝から酒を飲んでいた。其処に名越殿が討たれた情報が入り、今度は丹波路に移動する、と言う…大将の足利殿は何を考えておられるのか…

謀反では無いと思うが、もし、そうであれば我々も謀反の仲間になってしまふ…此処は六波羅(幕府本陣)に報告しなければなるまい…」言われて見れば尤もなので奴可四郎も異議無く、「よくぞ申された。実は拙者も怪しいと思ひながら手勢が少ないので為す術もなく悩んでいたところで早速、此の場を離れましょう。しかし、何もせず

に引き返すのも残念ですから少し戦つてからにしようと思うが如何ですか？」と言う。

中吉十郎は慌てて「…何を申される…我ら二、三十騎で大勢の敵に向かえば犬死になる！此処は功名を諦め一刻も早く知らせることです」と止めたので、兩名は馬を駆つて都に戻り事の次第を幕府に急報した。当然ながら知らせを聞いた幕府は「信頼していた足利尊氏も敵になった！」と愕然としたが、落胆するばかりで対策は無い。

○足利殿は篠村に着き、国人が馳せ参じた事

幕府側から天皇方へ転属？した足利尊氏は現地陣取つて近辺の武士たちに参加を呼び掛けた。待遇はともかく落ち目の「幕府」に付くより「天皇」に付いたほうが聞こえは良いから、先ず現地の久下彌三郎時重と言う武士が二百五十騎ほどで駆け付けてきた。此の武士団は家紋と言うか旗印に「一番」と言う文字を使っていた。

興味を持った足利尊氏が重臣の高師直を呼んで「家紋の由来」を尋ねさせると、かつて源頼朝が伊豆に挙兵した際に、武蔵国の住人・久下二郎重光が真つ先に駆け付けた。喜んだ頼朝が「もし天下を取った時は一番に恩賞を授ける！」と言つて「一番」と書いた書き付けを与えた。それを家紋にしており此の度も一番に駆け付けたのである。謂れを知った尊氏も喜んで久下に褒美を与えた。

其の頃、京都近郊に居た中小武士団はそれぞれに勢力を持ち、幕府の権威が衰えて来たことを知りつつも對抗勢力である足利商会の実力が不明なので対応に悩んでいた。それでも倒産が決定的な大会社より中小企業でも堅実な方が良いし其れが源氏系資本の会社らしいと言うので、近辺の寺院

などに籠っていた足立、荻野、小島、和田、位田、本庄、平庄などの零細企業武士団と丹波・若狭辺りの小勢力が、久下の一番に刺激されて足利尊氏の許に集まってくるようになった。

流れというのは侮れないもので、其の勢力は二万三千余騎に膨れ上がった。当然ながら其の情報は六波羅の幕府機関にも伝わる。当時の幕府軍は「此の度の合戦は天下を分ける戦いになるであろう」とし、戦況不利の場合には何よりも天皇を抑えて関東に下向し、鎌倉を拠点として勢力を回復した後に大軍を挙げて敵を追討しよう」と決めていた。準備が良い」と言うよりも、最初から戦う気力も策も無かったことになる。

そうとは知らない（知る事も出来ない）天皇・皇族・公家・重臣・女官・それらの家臣から下働き、更に警護の武士など数え切れない程の者どもは続々と六波羅の幕府機関に疎開して来た。其の為に京都の街が寂れた：らしいから、無駄なメンバーを朝廷と幕府が雇用していたことになる。

逃げては来たけれども、何をどうする手段も実力も無い連中なので天皇以下、無駄に嘆いているしかない。京都を離れた：と言っても郊外に移動しただけであるから敵が其の気になれば無事では済まないのである。遅いけれども其れに気付いた天皇は心配で夜も寝られず、そうかと言って昼寝も出来ずに居たから疲労が重なる。

京都には伝統的な祭礼が多かったらしいが「敵が攻めて来る」のでは其れどころでは無く古い歴史の中で初めて「祭礼無し」が実現？したことになる。其の中に敵（官軍）から親切？な知らせが来て：五月七日には京都に押し寄せて合戦する」と言う。幕府は対応策として篠村・八幡・山崎の

陣営から兵力を割いて都の守備を固めた。しかし都への侵入経路は多いから、敵が何処から来るかは分からない。言うなれば「籠の鳥状態」なので六波羅こと幕府の軍勢はカラ元気で居たが、内心では誰もが不安を抱えていたのである。

作戦と言う程の知恵も出ないが幕府は状況から「合戦は市街地が有利」と判断し、都の各所に要害を構えて騎馬の敵を防ぐことにした。更に籠城作戦にも備えて幕府本陣の周囲を掘で囲み鴨川の水を引き周囲の土手を高くした。要所には障害物を設け、櫓を増やしたりしたので万全の備えをした様に見えるが、元々が城では無いから何処か中途半端である。幕府の存亡を掛けた合戦になるので全てを捨てて戦う準備と覚悟が必要なのに：

○高氏、願書を篠村八幡宮に籠められる事

元弘三年（一一三三）五月七日早朝、足利高氏は二万五千余騎の軍勢を率いて予定通りに篠村宿を出立した。未だ暗い中であるから馬にも「静かに！」と言いついて進むうちに、篠村宿の南に森深い社殿が有るのを見つけた。幽かでは有るが神職が奉仕する鈴の音も聞こえる。名も知らぬ社殿ではあるが、是から合戦の場に赴く身であるから武運を祈ろうと、下馬して兜を脱ぎ参詣をしている時に神社の巫女さんが通り掛かったので「此の社は如何なる神を祭祀するのか？」と訊ねた。

聞かれた巫女さんは「都から遷されたので篠村八幡と申します」と答えた。高氏は「八幡の神は、我が一族が崇拝する神である」と喜び、家臣に命じて筆記具を準備させてから長々と願文を書きあげ、社殿で朗々と読み上げた。

家臣たちは迷惑したが感動した振りをして、高氏

も満足して其の願文に鏑矢一筋を添えて奉納したから、家臣たちも仕方なく矢を献上したので社殿に矢が溜まった。神社側は「矢（や）だ！」とも言えない。後で焚木にでもしたのであろう。

其の中に夜も明けたので軍勢は行進を開始し、大将の足利高氏が大江山を越える時に、一羽の山鳩が飛び来たって軍旗（源氏の白旗）の周りを周回した。高氏は喜んで「八幡大菩薩の御加護である」と「鳩の飛び行く方向に進軍すべし」と命じた。鳩は速度調整をしてくれたので其れに従って進軍し、都に入って内裏の旧跡まで進む事が出来た。

其の途中でも、其れまで敵軍であった者たちが次々と降伏してきたので、二万五千であった足利軍は五万余騎が増えて都入りをしたのである。

○六波羅（幕府本営）攻めの事

鎌倉から援軍として来た筈の足利軍が思いがけず敵に回ったので幕府は驚いたが、緊急事態に対応して保有する軍団六万騎を三手に分け、一手を神祇官と言う役所の前に配して足利軍に備えた。

他の二手は東寺で赤松軍を防ぎ、伏見で千種軍を防ぐ作戦である。合戦は午前九時頃から各所同時に始まり、騒音が天地に響き砂塵が空に舞った。両陣営共に大軍を擁して牽制し矢戦を続けていたが、其の中に攻撃軍の中から値段の高そうな鎧を着けた武者が只一騎で現れ「其の身、不肖なれば名を知る人も有らじ是に出でたるは足利殿に従う設楽（しだら）五郎左衛門尉と申す者なり。六波羅殿の御家中（幕府軍）に我と思わん者有らば、懸け合つて（戦つて）手柄の程を示されよ！」と大太刀を兜の正面に翳し馬を止めて高声で名乗り

を上げた。有名人物では無いが一騎当千の武士に見えたので両軍共に合戦を中断して拝聴した

暫くして幕府陣営からも黒糸緘の鎧に五枚兜の緒を締め、白栗毛の馬に青房を掛けた年齢が五十歳ほどと思われる武者が現れ、名乗りを上げた。

「其の身は不肖なれど多年に亘り奉行の列に加わり末席を汚す者なれば筆取り（事務職）と侮って合わぬ敵と思われるな！我が先祖は將軍として知られた藤原利仁公であり、其の十七代目を継ぐ齋藤伊豫房玄基と申す。今日の合戦は損亡に関わる一戦なれば命は惜しまず戦うので、生き残る者居らば我が合戦の事を子孫に伝えて欲しい！」集団で戦う合戦場が単独公演の様になったが、戦うよりも見ていた方が楽なので周囲が傍観している中に、元氣者の二人は組み打ち戦で激しい格闘の果てに仲良く討ち死にしてしまった。これに刺激されて足利陣営から紺色の鎧を着けた武士が現れ、「：八幡殿（源義家）より此の方、源氏、代々の武士として仕え名は知られて居ないが其れでは良き敵に逢い難い。其処で名乗るが、拙者は足利殿の家臣で大高二郎重成と申す。先頃の合戦で手柄を立てられたと聞く陶山（すやま）備中守、河野対馬守は居られぬか！勝負して人々に見せようでは無いか！」と勧誘した。

指名された二人のうち、陶山は八条陣へ応援に行き不在であったが河野は陣中に居たので折角のお誘いを喜んで受けることにした。ところが是を見ていた河野の子で十六歳になる七郎通遠が、父親を討たせまいと先に大高に組んで来た。其れを大高が捕えて「己（おのれ）の様な小者とは勝負しない！」と言いながら放り出そうとして鎧の氏名札を見ると河野の文字が見えた。そこで大高は

河野の一族であるを知り、片手斬りで退けた。是を見て当然ながら河野の家臣など三百余騎が主の敵を討とうと押し寄せ、其れを大高の友軍が千余騎で迎え撃つ大激戦となった。双方、多くの犠牲者を出しながら合戦を続け、勝負は分からなかったが、軍勢としては足利軍が優勢なので幕府軍は徐々に退いて六波羅へ疎開するほかは無い。

一方、反幕府勢力は敵の後を追う様に先ず赤松入道圓心軍が三千余騎で東寺へ寄せた。幕府軍が籠っているので楼門は閉じられ、周りは障害物で固められている。攻撃軍の指揮官が「あの木戸を撃ち破れ！」と下知したので、宇野・柏原・佐用・真島などの武士団から若武者三百余が騎馬を下りて走り寄った。其処からは内部が良く見える。

敵も考えた様で城門から先には、良く集めたと思われるほどに障害物を置き、両側の塀には何か怪しい物が塗りつけてある。更に溝をやたらと掘りまわし水を張ってあるが、深さが分からないから無防備には飛び込めない。躊躇っているとに播磨国の妻鹿（めが）孫三郎と言う武士が来て弓を水中に入れて見ると、先端が少し出る深さである。されば身長が立たないものと思ひ、太刀を抜いて肩に掛け鞘を投げ捨てて飛び込んだ。弓は堀底に刺さって深く見えたので人間はどうか立っている深さである。其れを見た武部七郎と言う武士が妻鹿を真似て飛び込んだのだが、背が低かったから立った状態でも沈んだのと同じである。

妻鹿が「拙者の鎧に取り付いて揚がれ！」と声を掛け、武部は妻鹿に取り付いて揚がる事が出来たので妻鹿は笑いながら「：そなたは、拙者を橋にして塀を越えたな：憎くい塀め！」と言いながら揺さぶったから、急拵えの塀は一気に倒れて攻

め手には有利な状況になった。この状況に慌てたのは守備軍である。急拵えの陣地から一斉に矢を射掛けて来た。妻鹿も鎧に何本かの矢を受けたので是を抜き取るうと高櫓の下に置かれた金剛像の前に立った姿が凄く金剛像と見分けがつかない。

攻撃軍は果敢に攻めたけれども一万余騎と言われた六波羅の軍勢も負けなかった。木戸口の合戦が不利と見るや何処からか援軍が来て攻め返したので妻鹿や武部らも危うく討たれそうになった。ところが、其処へ佐用、得平、別所などの武士団と赤松入道の軍勢など三千余騎が駆け付けて来たので状況が一変した。激戦の末に六波羅勢も幕府本陣へ退いたのだが其の軍勢は五万を越えていたのであるから、是を纏めて戦えば攻撃軍も勝ち目は無かったと思う。滅ぶべき運命なのか？日頃は武勇自慢の武士も疎開準備を優先したらしい。

それと言うのも幕府に守られる筈の天皇・皇室関係者、公家などから女房・稚児に至るまで無数の扶養家族が恐れ慄き、慌てふためき、泣き叫ぶばかりで収拾がつかない上に、頼るべき幕府の武士団も敵の優勢を知っているから「任せておけ！」などとは言えない。それどころか、日が暮れるとその武士団から逃亡者が続出してしまい、数万を数えた大軍団が僅か千騎に満たない零細企業並み兵力に変わってしまったのである。（続く）

（編集後記）

今月は5月連休のため発行が少し遅れました。次号（6月号）は6月4日（土）の発行予定です。

「ふるさと風の会 文庫展」「ことば絵同好会展」

6月11日(土)～15日(水) 石岡市・まちかど情報センター

(最終日は15時まで)

- ・花ちらし野山はみどりの競演
- ・どうぞどうぞこちらにお入りなさい 大木桜木の言う

ふるさと風の分科会「風のことば絵同好会」:

「ことば絵」とは、風の景(かけ)を色彩とことば詩(うた)によって表現する石岡に生まれた表現です。会員のこの一年間の遊創をご覧いただき、ご感想など頂けましたらと思います。

なお、風の会文庫も展示販売しております。

皆様のお越しをお待ちいたしております。

ふるさと風の会・ことば絵同好会 (担当: 兼平智恵子)

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…私本将門記「罪と名声」
虚構と真実の谷間、歴史余話 他
- ・兼平智恵子…歴史の里いしおかめぐり
- ・伊東 弓子…御留川を歩こう
- ・木下 明男…我が労音史
- ・木村 進…地域に埋もれた歴史(全30巻)
石岡地方のふるさと昔話、
常陸国における源平合戦 他
- ・菊地 孝夫…常陸旧地考(上・下巻) 他
- ・白井啓治(故):ふるさと物語(霞ヶ浦の紅い鯨)朗読/
ふるさと物語、他
- ・菅原茂美(故):遙かなる旅路(1,2,3)

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談:勉強会を行っております。会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

HP <http://www.furusato-kaze.com>

木下 明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659
木村 進 080-3381-0297 編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)